



澤田 拓子

SAWADA Takuko

塩野義製薬取締役副会長
関経連副会長

どう育てる? イノベーションを担う人材 ～私の処方箋



このたび関経連の副会長を仰せつかりました。これまで務めていた委員長を継続しつつ、副会長としても担当することとなったベンチャー・エコシステム委員会をはじめ、関経連の活動に微力ながら全力を尽くしていきたいと思っています。

最近、最も関心があるのは「人材育成」です。日本のベンチャー・エコシステム構築に関する要素のなかでも、課題にあがるのは「人材育成」です。現状を打破して起業したいという若者も増えている一方で、今、それなりに生活できていることから、将来に不安を持ちつつも「今までいけるだろう」と、現状に安住しようとする若者も多く、2つのグループのギャップが広がってきている印象を持っています。

COVID-19が引き起こした社会の変化や生成AIが登場してきている状況などを考えると、今後、世界はとてつもないスピードで変化していくでしょう。私が出席している「新しい資本主義実現会議」でもリスクリングが話題となっていましたが、ポイントは、現状から抜け出すためにどうすれば良いのか迷っている方々に、モチベーションを持っていろいろなことに関心を抱き、自らの能力を向上させるための具体的な行動を起こしてもらえるようにできるかだと思います。職務給の導入推進はそのための施策の一つであり、どのような能力を身につけるべきかの参考になると思います。

また、日本では、居心地が良いので似た者同士で集まりがちですが、それでは多様性の問題が残ります。例えば、企業に同じような技術、経験、考え方を持つ人が多く、多様性が低いと、女性や海外の方、IT系人材など、今後必要な技術や経験を持った人材を活用する際に、背景にある文化がまるで違うため、戸惑ってしまうでしょう。そうなると社内連携もうまく行かず、“本当に新しいもの”を作り

出すことは難しくなるでしょう。

そのような事態に陥らないよう各人が意識して、いろいろなことに興味を持ち、さまざまな人と話をするようにすると、世の中には自分とはまったく違う人たちや世界が存在することに気づくことができます。私の経験をふまても、これから皆さんには自ら求めて社外のネットワークを作っていくことをおすすめしたいですね。そうした意識や行動が、イノベーション創出に必須である多様性を高めることにつながり、今後の関西・日本の発展に寄与するのではないかでしょうか。

そして、各国からさまざまな人がやって来る2025年の大阪・関西万博は、グローバル・ネットワークを構築する非常に良い機会だと思います。関西の企業が海外のスタートアップ企業、ベンチャーキャピタルなどとネットワークを築いていけば、グローバルに広がるエコシステムを関西で構築することができるでしょう。

こうしたことを実現するためには、日本独特の文化を考慮することも大切だと思います。「科学技術をどう活用するか」という思想のベースには、必ず「文化」という要素が入ってくるからです。単純に技術だけを比較すれば、アジアの雄は残念ながら中国に取って代わられてしまいました。しかし、そのような状況でも「日本でビジネスがしたい」という声はあります。それは、はっきりと意識はしていなくても「日本文化を基盤とした、科学技術・イノベーション」を評価しているからではないでしょうか。こうした日本の素晴らしい文化とイノベーションをリンクさせる形で輸出することができないかと考えています。文化庁の京都への移転、大阪・関西万博の開催なども考え合わせると、関西こそがその発信にふさわしい地だと思います。

(談)